

# 民俗的古式技法の存在とその意味 特に編組技法について

The Existence of Ancient Folkloric Techniques and Their Significance

## 名久井文明

はじめに

- ①縄紋時代の編組技法
- ②民俗例における編組技法
- ③民俗的古式技法の存在とその意味

おわりに

### [論文要旨]

縄紋時代人が繊維状の植物性素材で入れ物その他を作成した技法には「組む」「編む」の2種類があった。しかし一般に「組む」「編む」という用語で現される技法の内容は混乱している。そこで筆者は「組む」「編む」の用語は厳密な技法の違いを反映すべきであるとの考え方から、まず両者の差異についての見解を明確にした。縄紋時代の遺物から観察できる「組む」技法には「四つ目組み」「石畳組み」「ござ目（ざる目）組み」「飛びござ目組み」「木目ござ目組み」「六つ目組み」「網代組み」などの種類があること、「編む」技法には「縄目編み」「ねこ編み」があることを明らかにし、それぞれの技法で製作された遺物を例示した。また編組技法で入れ物を作る場合、必ず先に底部を作つてから側壁の形成に移行し、その後に口縁部を形成していることを指摘した。底部を形成する技法には「網代底」「菊底」「縄目編み底」等の種類があり、口縁部を形成する技法には「縦芯材折り込み縁」「縄目返し縁」「巻き縁」「返し巻き縁」があることを明らかにし、それぞれに該当する遺物を例示した。

以上の植物性素材を用いた縄紋時代の造形上の諸技法は、ほとんどそのままのかたちで近現代民俗例にも存在していることを述べ、それぞれの技法で製作された民俗例を示した。これらの要素が縄紋時代と民俗例とでよく共通しているのは偶然ではなく、諸技法が幾百世代にもわたって受け継がれてきたからである。その背景としては、縄紋時代から現代まで、それぞれの時代の人々は食料をはじめとする各種の自然物を採集し、運搬し、収納、保存するためにはそのための入れ物その他の用具が必要であったこと、その製作素材として自然素材を使い続けたことにあるとした。